

日なたのあやとり

——あり得るかもしれないもうひとつの物語

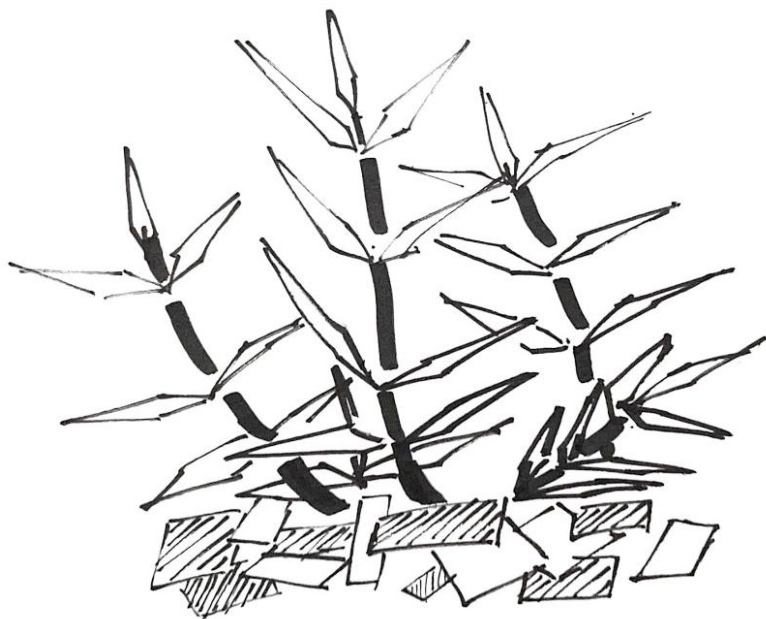
山を崩し谷を切り拓き、大地を踏み固めて平たい土地がつくられた。その上に敷き詰められた砂利は、根を張るものたちを遠ざける。人為的な植生のコントロール。しかしそのなかにも響きあういのちの躍動があった。

これは日当たりの苛烈な、林業機械学習棟の隣の区画での一幕である。

木こりの卵たちはここでチェーンソー技術の習得に励んでいた。山の中の複雑な地形でやる前に、危険の少ない平たい場所で基本の伐倒技術を体得するためだ。

精神を研ぎ澄ませながら、彼らはエンジンを始動させる。そして丸太を注意深く見つめ、高速で回転する鎖の刃で粉碎し、削り取ってゆく。けたたましい響きと共に噴き出し、水溜まりのように地面に広がる木屑。

木こりにとってはただの副産物でしかないその木屑を、見逃さなかったものがいた。足元に生える芝である。



彼らは人間からはコウライシバと呼ばれている植物で、九州以南の東アジアを原住の地とする。地を這い、他の植物がまだ生きていける環境ではないところに果敢に身を乗り出してゆく先駆種である。ここでもまた、植物を排除することを目論む人間の意図をかいくぐり、偶然生まれた木屑の小島を掴んだ。

匍匐茎を伸ばし広げながら根を張れる場所を探り、照り付ける太陽に向かって葉を目一杯光らせる。他の植物が強制的に退去させられていることも、コウライシバにとってはむしろ陽光を独り占めできて好都合だった。

また、踏まれることに強く、柔らかく地を覆うという性質は、人に大変好まれるものであった。隣に設けられた morinos という野外活動施設の広場には芝生が一面に張られていて、五感で自然を味わおうとする子どもたちの足の裏を守ってくれる。コウライシバは人に愛されて、morinos まで招かれここまで旅してきたのだ。

そして今回もまた、多少車に轢かれようが意に介さず生きていたり、輻射熱を和らげたりといった能力を建築家の卵たちに買われた。彼らは自力建設というプロジェクトのなかで、建設予定地に生えていたコウライシバを外構に利用しようとしている。

学生たちはコウライシバを「しばちゃん」と呼び、生命にかかわりそうな蒸し暑さとセミの鳴き声を浴びながら朝晩水を撒いたり、葉の色味を確認して調子を推し測ったりしている。その様子は自らの作品制作に他種を引きこもうとする野心家のようにも見えるし、あるいは主の生息範囲の拡大のために奔走する忠実な下僕のようにも見える。いたわりあいながら、便乗しあいながら、主従はもつれ、転がり続ける。



文：千々和 駿
挿絵：長 航介